明治大学大学院教養デザイン研究科紀要

IZUMIA LIBERALIA: Annals of Graduate School of Humanities, Meiji University

11

明治大学大学院教養デザイン研究科紀要

11

IZUMIA LIBERALIA

2019年3月31日発行 *IZUMIA LIBERALIA*
明治大学大学院教養デザイン研究科 Graduate School of Humanities, Meiji University

【映像資料プログラム】

ツノダヒロカズ講演

「スポーツを通じた社会貢献活動とボランティア」

釜崎　太・張　寿山

三・一一以降、福島の状況を報告する映像資料は数多く製作され続けている。特に、地震・津波に続いて発生した原子力発電所の「想定外」の事故が人々に及ぼし続けている影響は、近親者の喪失や物理的な被害とは質の異なる影響を与え続けており、未だにその全貌を掴む事はむずかしい。既に見えていることは、原発事故は地域コミュニティを崩壊させ、人々が描いていた日々の生活や将来設計を大きく変更せざるを得なくさせているという事である。

教養デザイン研究科の行う「映像資料活用による学際的アプローチの醸成プログラム」でも福島をテーマとした映像資料が既に二回取りあげられており、今回が三回目となる。「巨大地震・津波・メルトダウン～崩れた原発安全神話」（二〇一一年七月）、「福島・浜通り　原発と生きた町」（二〇一四年十二月）、そして福島ではないものの原子力発電政策について取りあげた「夏休みの宿題は終わらない～核燃料再処理施設の危険に迫る」（二〇一二年十一月）も含めて、これまでの映像資料は何故事故が起きてしまったのか、何故このような危険性の高い技術を用いるという決定をしてしまったのか、そして

そのような決定を受け入れてしまったのかといった視点から、過去の原発推進政策の是非或いはその背景を問い、原発事故は人災であったことを明らかにする内容であった。

これに対して、今回の「MARCH」は原発事故によって全く異なる人生を歩まざるを得なくなった人々の葛藤と、その様な人々に対する支援を描いた作品である。事故発生から既に八年が過ぎた今も、多くの人々が事故により強制された人生の選択を背負いながら葛藤を続けている。このことを全国大会出場の常連校であった南相馬市立原町第一小学校マーチングバンドのSeeds＋としての再結成と、その活動を支援するJリーグクラブ愛媛FCを軸にして描いている。

この映像は、震災後の原発事故によりそのまま放置されている被災地の惨状、そして福島県と東京電力が第三セクター方式で建設し、国内最大規模のサッカー施設であったJヴィレッジの施設やグランドに原子力発電所事故対応に取り組む作業員のためのプレハブ宿舎が並ぶ姿を映し出す。しかし、原発事故で生活の場を取りあげられた人々にとって失われたのは空間だけではなく、時間でもあることが映像に登場する子供の次のような発言であきらかになる。

「椅子や机が倒れてきて、防火扉が閉まり始めて。やっと先生の声が聞こえてきて、『机から離れろ』とか『窓開けろ』って声がいっぱいありました。そこから校庭にみんなで避難して。津波が来ると言われ体育館に避難しました。海の近くに家があって、津波が来るから『それ以上家には行けない』と言われて学校に戻りました。そのまま避難です。（その後、福島第一原発一号機が爆発し）福島市に避難して、そこから六ヶ月間くらいはそっちの学校にいました。一番仲の良い友達とまた会えると思って『バイバイ』も言わないで帰ったんです。それから四年間、今も全然会えないし、居場所も連絡先も分からない」。

事故から一ヶ月以上がたち、ようやく避難地区外の小学校で授業が再開されたとき、登校したマーチングバンドの部員はわずか四人しかいなかったという。マーチングを続けたいという子どもたちの声を保護者と教師が支援するかたちで練習が再開されると、遠方に避難していた子どもたちも、少しずつ南相馬に戻ってくるようになる。しかしながら、こどもたちが激減し、単独での小学校バンドとしての活動はできず、一方で卒業した中学生

にもマーチングを続けたいこどもがいたことから、小学校二年生から中学三年までが所属するSeeds＋を結成。このSeeds＋にマーチングを披露する場所を提供して欲しいとの呼びかけに愛媛FCが応え、二〇一四年に愛媛ニンジニアスタジアムで行われるJリーグの試合の前にSeed＋を招待してマーチングが行われ、スタンドからはSeeds＋への応援コールが起きた。Seeds＋のこどもたちもマーチングに行われた試合をスタンドから応援し、試合は愛媛FCの終了間際の劇的なゴールで決着する。Seeds＋と愛媛FCの関係はその後も継続している。

この映画のプロデューサーであるツノダ氏は、それまでは丁髷と甲冑というスタイルでサッカー日本代表の試合に現れる、自称「日本代表応援団長」としてサッカー関係者には知られていた。そのツノダ氏が東北大震災でサッカーを通じて何か支援ができるのではないかと考え、ボランティアとして災害支援に取り組み始め、それがひとつの形となったのがこのMARCHであった。映像をはさんで行われたツノダ氏の講演では、福島以前はまったくボランティアとは縁の無かった自分が何故ボランティアに取り組み始めたか、そしてその後ネパールの震災、熊本震災、そして愛媛での集中豪雨等での支援ボランティアを継続する中で感じていることが学生へのメッセージとして語られた。

ツノダ氏は最初に日米英の大学生就職人気ベスト二〇を紹介し、英米のベスト二〇にはここ数年多くの社会貢献を目的とする非営利組織が含まれるように変化してきていること、そして今は高給が期待できる安定した大企業だけの日本のリストにもやがてこの傾向が現れるのではないかと予測する。

講演当日も愛媛県の被災地支援から駆けつけたツノダ氏は、被災地で摘まれたみかんを配りながら、被災者に喜んでもらえるボランティアをするためには、現地のニーズを知ることが重要であり、その為には被災地に被災者の方々の実態を知る拠点（人）の存在が欠かせないとする。ツノダ氏が行ってきたのは、被災地での野菜いっぱいちゃんぽんの炊き出しであり、かき氷の提供であり、これらは何れも行政が準備した支援項目には含まれておらず、時には勝手な支援の押しつけをするなどの批判もされた。そのような前例やマニュアルにしばられないツノダ氏が感心したボランティアが、福岡大学の学生が被災地の避難所で子どもたちと一日遊んでいたこと。「こどもと遊ぶ」という項目は行政による支援マニュア

ルには全く含まれていないが、まさに被災地の人々が最も喜ぶ支援のひとつであった。

このような被災者のニーズに沿った支援を可能にしている理由がサッカー日本代表の応援を通じて得られた仲間たちとのつながりである。MARCHでの愛媛FCによる支援も含め、サッカーを通じた仲間という緩い連帯は、市民レベルでのボランティアのような活動において最も効果的な繋がりになることをツノダ氏の経験は示している。

当日は時間のマネジメントが拙かったことから、質疑応答の時間が取れなかったが、講演を聴いた学生たちは、学生時代或いは就職後にボランティアに取り組むことへのハードルを低くする多くの情報や心構えを得たと確信する。

【映像資料プログラム】

勝田忠広講演

『チャルカ～未来を紡ぐ糸車～』

実施日：二〇一九年一月十七日（木曜日）
会場：和泉図書館ホール
コーディネーター　森永由紀教養デザイン研究科教授
　　鳥居高教養デザイン研究科教授

鳥居　高

はじめに

「フレコンとは何か」と問われて、首都圏在住の院生・学生がどれぐらい答えられるだろうか。

フレコン＝フレキシブルコンテナ（flexible container）は、福島県内を南北に貫く国道六号を北上していくと、栖葉あたりから左右にうずたかく積まれている。その異様な光景がこの八年、東日本大震災の被災地に通った私の眼には「ごくありふれた光景」になってしまってきた。その中には福島第一原子力発電所が被災したことによって生じた放射線に汚染された土壌が梱包されている。そして、これらは、いつか―現時点では未確定―最終処理場へ運搬されるために積み込まれたままポリエチレンなどで作られた梱包材の中で、その日、その場所を待っている。東日本大震災より、九年目を迎えていても未だに解決されずにいる問題の一つである。